

中国における日本語学習者の日本語力に 影響を及ぼす外的学習者要因

副 島 健 作
金 城 尚 美*
武 藤 彩 加**

要 旨

本研究は、日本語力に影響を及ぼす外的学習者要因について検証したものである。協力者は中国の日本語専攻の大学生 171 名、調査ツールは全 80 項目の質問紙と SPOT および JSST の成績である。データを因子分析等により統計処理した結果、次の 4 点が明らかになった。

- I. 学習ストラテジーおよび動機づけには「日本文化理解」「実践会話重視」「用意周到」「サブカルチャー」「活動積極参加」「リソース活用」「キャリア」の 7 因子がある。
- II. 学習者は「統合的志向」「道具的志向」「バランス志向」「消極志向」「積極学習志向」のタイプに分類できる。
- III. 「統合的志向」の学習者は日本語力が高く、「道具的志向」の学習者は低い。
- IV. 会話力の成績上位群は「実践会話重視」を好む。

以上により、中国内で日本語を勉強している学習者はサブカルチャーを好み、統合的動機づけの高い学習者は日本語力が高いと言えるが、会話力は実践でしか促進されない、ということが明らかになった。

【キーワード】 外的学習者要因、学習ストラテジー、動機づけ、会話力、実践会話重視

0. 序

IT 環境の激変で日本語学習者の学習環境が変化しつつある近年、中国において「自然な日本語」を身に付ける者が増えている。その要因を究明するため、第二言語学習者が目標言語を学ぶ際に影響を与える外的学習者要因、すなわち、学習ストラテジーおよび動機づけと日本語力・会話力との関係について明らかにすべく、調査と分析を行った。

1. 背景と目的

1-1 「自然な日本語」使用の個人差

近年の留学生数の増加にともない、留学形態や国籍が多様化し、留学生の日本語力にも多様性が見られるようになった。日本語使用に関してはアクセントや語彙・文法の使用、会話の流暢さなど言語運用の面で差が顕著である。例えば中国の学生は来日時から一般的に読解能力に優れているが、会話や口頭発表、作文などでは不自然な日本語を使う者が少なくない。しかし一方で母語による影響が少なく、アクセントにあまりクセがない者もいる。なかには 1 度も渡日経験がないにもかかわらず、語彙や文法がより自然な日本語に近く、適切に選択ができていない者もいる。

*琉球大学留学生センター
**琉球大学留学生センター

日本語の知識を問うブレイスメントテストで同じレベルに配置された日本語専攻の学生の間でも、日本語の運用能力に差が見られることが多いが、こうした個人差が生じる理由は何だろうか。来日時の学習者間の日本語運用能力が異なる要因を解明するには、学習者の特性を明らかにすることが一つの手がかりとなり得る。

1-2 学習者要因

第二言語学習者が目標言語を学ぶ際に影響を与える要因としては、知力、言語適性、年齢、学習スタイル、性格、動機づけ (motivation)、学習ストラテジー (learning strategy) 等が挙げられるが、これらの要因を尹 (2011:17-18) は、学習者の一般的特性と考えられる「内的学習者要因」と社会的・文化的な要因に影響を受ける「外的学習者要因」に分類した。前者は、環境の影響が少ないいわば「生得的」な要因であり、後者は他者や外部からの影響を受けることによって言語学習に働きかける要因である。目標言語の習得には、内的要因である知力や言語適性、性格等個人差が多く起因しているが、一方で、外的要因も看過できないものである。

外的学習者要因としては、学習者が自らの言語能力を向上させようとする際に用いる方策・手段、創意・工夫など学習上の戦略としての言語学習ストラテジー、行動を始発させ、目標に向かって維持・調整する過程・機能である動機づけ、学習者または教師が言語学習についていただく信念の総体としてのビリーフ (belief) 等がある。このうちビリーフは内的要因に含まれたような生得的性質ももつのに比べ、学習ストラテジーや動機づけは他からの影響を受けることによって第二言語学習に働きかける要因である。尹 (2011:18) は学習ストラテジーが「外部からの働きかけによって学習者が新しく習得したり、改善したりできる要因」であり、「教師不在の環境で日本語学習者が自らの学習を進めていくときに重要な役割を担う」ものであるとするが、他からの影響によって変更可能な動機づけにも同様のことが言える。すなわち、学習ストラテジーと動機づけはどちらも日本語教育への応用を考える上で重要な要因である。

優れた学習者の学習行動の特徴を明らかにするためには、このような様々な学習者要因を1つ1つ丁寧に調べていく必要があろうが、さしあたって本研究では、日本語学習者の外的学習者要因に着目し、学習ストラテジーや動機づけと日本語力、日本語会話力との関係を明らかにして、どのような特徴が日本語らしい表現を身に付けることにつながっているのかを探る。

2. 先行研究

第二言語教育において動機づけや学習ストラテジーといった外的学習者要因は、学習者の目標を達成するための要因の一つとして重要視され、動機づけ (Deci, 1975; Gardner & Lambert, 1972; Dörnyei, 2001 等)、学習ストラテジー (O'Mally et al., 1985; Oxford, 1990 等) の他、動機づけと学習ストラテジーとの関係 (Oxford et al., 1993; Chamot et al., 1999; Hiromori, 2004 等)、動機づけや学習ストラテジーと学習の成功度との関係 (Dörnyei, 1990; Gardner & MacIntyre, 1991; O'Mally & Chamot, 1990; Macaro, 2001 等) 等について研究がなされてきた。中国語母語話者を対象とした研究は尹 (2001)、板井 (2002)、館岡 (2005)、郭・全 (2006)、荒井 (2008)、関崎 (2009)、堀越 (2010a)、堀越 (2010b)、楊 (2011) 等がある。

荒井 (2008) は、中国語を母語とする台湾の学習者を対象として学習スタイルについて研究を行っている。台湾人日本語学習者 382 名へのアンケート調査と 8 名の授業観察と面接の調査結果をもとに、学習者の学習スタイルが様々な個人差要因と複雑に関連していることを明らかにした。

さらにクラスタ分析により「順応学習」「消極学習」「共同活動学習」「活用自律学習」の4パターンに分類し、それぞれに合った指導案を提示した。こうして、学習者を傾向ごとにグループ化することで、より詳細な指導法の検討を行うことが可能であることを示した。

楊（2011）は、台湾の日本語学習者を対象に動機づけと継続ストラテジーの構造との関係性を明らかにする研究を行い、継続ストラテジー使用の選択は、動機づけから影響を受けていること等を明らかにした。また関崎（2009）は、北京の大学で日本語を専攻する学生を対象に学習観と学習に対する自律性を明らかにする研究を行い、日本語の学習を就職と結び付ける傾向は学年にかかわらず強いこと、日本語を就職のためと考える割合の方が、日本人を理解するためと考える割合よりも高いこと、学習者は自律的に学習に取り組む姿勢を持っていること等を明らかにした。一方、尹（2001）は、北京の大学の日本語専攻の学生を対象に行った学習観と動機づけに関する調査から、語彙や文法を重視する傾向があること、正しく話せなくても日本語で話すことに挑戦する姿勢があること等を見いだしたが、道具的動機づけ（instrumental motivation）は高くはないとした。

以上のように、同じ中国北京の日本語専攻の学生の動機づけの調査でも、尹（2001）では道具的動機づけは高くはないとされるのに対し、関崎（2009）では高いとされていて、まったく逆の主張となっている。いずれの研究においても、正しくなくても話すことに挑戦する、自律的に学習に取り組むといった、学習者の積極的な姿勢を指摘してはいるが、そうした学習ストラテジーが学習成果とどのような関係にあるかについては、不明なままである。

堀越（2010b）のように動機づけと学習ストラテジーとの関係、そしてそれらが学習成果とどのように結びついているのか、といった観点から分析した研究は少ない。板井（2002）は、香港の大学の日本語学習者を対象に動機づけ、ビリーフ、学習ストラテジー、学習活動の好みについて明らかにする調査を行い、成績との関連性を分析しているが、成績については、5段階の自己評価データを用いており、客観的なデータによる研究ではない。また館岡（2005）は、日本の留学生別科で学ぶ日本語学習者を対象に、学習動機、学習観、成績、満足度の関係を検討するアンケート調査、インタビュー調査を行っているが、調査対象者が14人と少なく、また出身国も3カ国にまたがっている。郭・全（2006）は、中国ハルビンで日本語を学ぶ学習者の動機づけが学習にどう影響を及ぼしているかを調べ、6つの動機づけの因子を抽出している。その中で、道具的動機づけである「仕事因子」が学習の成績を予測する因子であると統計分析により結論づけている。さらに日本の若者文化に接することによって芽生えた日本や日本語に対する興味は、必ずしも日本語の上達に結びついていないと考察している。

一方、堀越（2010a）は、台湾の日本語学科で学ぶ学生を対象に動機づけと成績との関連を明らかにする研究を行い、日本や日本文化について知りたい、楽しみたいという意識が強い者、すなわち統合的動機づけ（integrated motivation）が高い者ほど大学の学業成績もそれに比例し良い傾向にあると指摘する。しかし、これら一連の研究でも、学習成果と関連がある動機づけは道具的動機づけか、統合的動機づけか、はっきりしない⁽¹⁾。これは社会情勢や日本企業への就職可能性、中国政府の政策など、地域や時代による影響も大きいからだと思われる。ただ、IT環境の激変で学習環境が様変わりした昨今の中国における状況はどうか、現状を調べておくことは、今後の日本語教育をより良いものにしていくうえで必要である。

そこで本稿では、中国本土で日本語を学ぶ学習者を対象とし、外的学習者要因つまり動機づけと学習ストラテジーが言語習得に及ぼす影響について分析する。その際次の2点に着目する。1

点目は、外的学習者要因が日本語力の向上にどのように関わっているのか調べることに、そのために2点目として、動機づけと学習ストラテジーのうちどちらのどのような要因が会話力と関連があるか分析すること。これらを明らかにするため、本研究では、従来別々だった動機づけと学習ストラテジーの調査を、外的学習者要因として同列に取り扱う。

3. 研究目的と研究課題

前述の先行研究を踏まえ、本研究では日本語を学ぶ機会（教室活動、授業外の予習・復習、その他の日本語を使用した言語行動等を含む）に関わる外的学習者要因、すなわち、学習ストラテジーや動機づけのうち、どれが中国で学ぶ日本語学習者の日本語力に最も影響を与えるかについて検討する。日本語学習者の多くを占める中国出身の学習者の実態を把握することは、効果的に日本語を教えるうえで非常に重要である。研究課題は次の2点である。

研究課題1：日本語力と学習者の学習ストラテジーや動機づけにはどのような関連があるか。

研究課題2：どのような外的学習者要因が会話力と関連しているか。

4. 研究方法

4-1 分析データ

4-1-1 外的学習者要因データ

福建師範大学、中南林業科技大学、華中科技大学に在籍する3、4年生の学生178名（有効回答数）を対象に2011年12月に日本語学習のストラテジーおよび動機づけを探るため、3大学を訪問した。そこでアンケート調査を実施、集計し、その結果を「外的学習者要因データ」とした。この3大学を選んだのは、いずれも経済が進んでいる地方の中心都市の大学であり、周辺地域からの入学者も多く、多様な背景の学習者が在籍していると考えたからである。福建師範大学のある福州市は日本に近い東南沿海にあり、中南林業科技大学のある長沙市や華中科技大学のある武漢市は、ともに華中の文京の町として名高く、いずれの大学においても日本語学習への関心が高い。さらに、北京や上海といった大都市や伝統的に日本語教育が盛んな東北地方に比べ、日本語母語話者への接触が少ないということも考慮に入れた。即ち、これら3大学は地方の大学の日本語学習者を代表するサンプルと考え、調査を実施した。

質問紙作成に当たって「学習ストラテジー」については、荒井（2008: 172）「付録3 質問紙『Learning Style Arai』」の質問1～35をもとに「動機づけ」については、荒井（2008: 69）の「表24 学習動機に関する質問紙の項目」および堀越（2010b: 267）「表2 日本語学習動機の因子分析結果」をもとに改訂し、中国語に翻訳の上、使用した。

4-1-2 成績データ

調査対象者にSPOT（SPOT_3およびSPOT_2）⁽²⁾を実施し、その結果を「SPOT成績データ」とした。そのうち、渡日経験が1度もない調査対象者をランダムに選定した79名にJSST（日本語会話力テスト）⁽³⁾を受験してもらい、その結果を「JSST成績データ」とした。SPOTは信頼性、妥当性のある統合的な日本語能力が推定できる間接テストとして広く認知され、プレイスメント・テストや簡易な日本語レベル判定の手段として広く使用されており（楊ほか（2012: 1-2））、総合的な日本語能力のデータとみなして採用した。また、JSSTは答えが準備できない質問に日本語

で受け答えしなければならず、「その時、その場で何を話せるかに基づいて日本語の運用能力を測る」発話テストで、より「自然な日本語」の測定が可能であると考え、会話力データとして採用した。

4-2 分析方法

上記データをもとに因子分析により外的学習者要因、すなわち、日本語の学習ストラテジーおよび動機づけ因子を抽出し、各因子の特性や関連性をみる。次に、データをクラスタ分析にかけ、学習ストラテジーおよび動機づけの因子の組み合わせにより調査対象者がどのようなタイプに分類されるのかについて調べ、SPOT の成績とどのように関連性があるのか分散分析を行うことにより、その相関関係を調べる。さらに JSST のレベルにより対象者を 2 群に分け、同様の因子がその成績にどのように影響を及ぼすのか分散分析を行い、会話力と相関の高い因子を明らかにする。

5. 結果

5-1 日本語学習の外的学習者要因の因子の抽出

まず、日本語学習のストラテジーおよび動機づけ 80 項目の平均値と標準偏差を算出し、天井効果（項目 3, 4, 5, 6, 12, 18, 21, 22, 55, 67, 68, 75）と床効果（69, 76, 77, 78, 79, 80）の見られた 18 項目を以降の分析から除外した。次に残りの 62 項目に対して主因子法による因子分析を行ったところ、固有値の解釈上、7 因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度 7 因子構造と仮定し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い、その結果十分な共通性や因子負荷量を示さなかった 23 項目（項目 1, 2, 7, 8, 10, 11, 16, 19, 20, 28, 31, 33, 40, 41, 42, 43, 44, 53, 56, 57, 58, 59, 74）を除き、再度同様の因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンを表 1 に示す。

最終的に日本語学習の外的学習者要因に 7 つの因子を抽出することができ、回転前の 7 因子で全 39 項目の全分散を説明する割合は 55.46% であった。本研究では日本語学習の外的学習者要因因子をそれぞれ以下のように呼ぶこととする。

第 1 因子：日本文化理解

日本人の価値観、行動様式、習慣、生活様式についてもっと知りたい、伝統文化や歴史、文学に関心がある、異文化としての日本文化を理解・体験したいといった統合的動機づけ。

第 2 因子：実践会話重視

習ったことをすぐ整理し、実際の言語場面で使用していくことによって身に付ける、また、分からないことがあったらすぐに教師に確認するといった学習ストラテジー。

第 3 因子：リソース活用

日本語のテレビ番組や映画を見て話し方を練習したり、日本の歌を歌ったり、日本語のラジオや CD、音楽、本、雑誌、新聞などのリソースを活用する学習ストラテジー。

第 4 因子：用意周到

授業は予習復習をしてから臨む。どう行動すれば日本語が上手になるかや既知のことと習ったこととの関係を考える。単語帳や参考書を使って自習をするといった学習ストラテジー。

表1 外的学習者要因の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

	因子						
	I	II	III	IV	V	VI	VII
64 日本人の価値観や行動様式を知りたいから	.850	-.137	.017	.034	-.004	.098	-.080
62 日本の伝統文化を知りたいから	.780	.032	-.078	-.008	-.019	-.022	-.046
61 日本理解に役立つから	.730	-.022	.001	-.001	-.035	.188	.031
65 日本人の習慣、生活様式(衣食住)についてもっと知りたいから	.726	-.140	-.105	.028	.094	.160	-.007
66 日本の歴史に関心があるから	.672	.107	-.012	-.196	.116	-.147	.001
63 日本文学や小説に関心があるから	.497	.196	.053	-.149	.020	-.150	.051
60 国際理解・異文化理解の一環として	.479	.081	.097	.150	-.026	.012	.101
54 日本の政治・経済・社会の知識を得るため	.417	-.065	-.009	.189	-.064	.009	-.033
73 日本のインターネットサイトを楽しまたいから	.370	.126	.058	-.011	.274	-.063	.056
46 間違いをおそれずに日本語を使うようにする	-.093	.668	.004	-.007	-.047	.059	.014
27 授業後、習ったことを使ってみる	-.130	.655	-.055	.106	.075	-.130	-.102
39 日本人と直接会って、話す機会を作る	.005	.614	.037	.107	.052	.019	-.039
26 授業後、習ったことをまとめる	.076	.520	.161	.035	-.124	.053	-.168
9 分からないことがあったら、クラスメイトの前でもすぐ教師に聞く	.159	.497	-.132	.073	.183	.019	-.147
45 できるだけ日本語で考え、逐語訳(直訳)をしないように心がける	.106	.470	.068	-.058	-.062	.055	.004
38 日本語の発音練習をする	.012	.450	.082	.157	.059	.019	-.062
34 勉強のために、日本語のテレビやインターネットを見る	.004	-.154	.735	.062	.007	.069	-.086
35 勉強のために、日本語のラジオや学習用CD、音楽を聞く	-.037	.127	.694	-.108	.106	.045	.004
36 勉強のために、日本語の歌を歌う	-.180	.066	.601	-.014	.246	.095	-.046
32 普段、日本語で書かれた本や雑誌や新聞を読む	.134	.101	.520	.074	-.067	-.018	-.095
37 日本語のテレビ番組や日本語の映画を見て、セリフや話し方のまねをする	-.109	.226	.508	-.090	-.064	.148	.131
25 授業後、教科書やプリントやメモしたものを直す	-.110	.183	-.099	.732	.110	.029	.072
24 授業の前までに、事前に知らされていた課題について自分なりに考えておく	-.088	.087	-.151	.615	.125	.106	.009
23 授業の前までに、教科書やプリントの言葉の意味を調べておく	-.067	.087	-.085	.542	.192	.266	-.141
48 どうしたら日本語が上手になるか常に考えている	.084	-.110	.284	.521	-.063	.003	.138
30 自分で単語帳(ノート)を作る	.122	.159	-.002	.492	-.154	-.282	.049
29 参考書を使って自分で勉強している	.127	-.198	.349	.448	-.028	-.042	-.061
47 日本語で既に知っていることと、新しく学習したこととの関係を考える	.022	.290	.061	.404	-.232	-.172	.202
71 日本のファッションに関心があるから	.135	-.053	-.103	.060	.804	.001	.033
72 日本のアイドル、また歌手や俳優などの芸能人が好きだから	-.032	.029	.112	.106	.780	-.048	-.023
70 日本の音楽に関心があるから	.033	.044	.264	-.115	.641	-.100	.168
14 ベアワークやグループ活動中、自分の意見を言う	.004	-.153	.194	.048	-.038	.731	-.061
17 ベアワークやグループ活動に積極的に取り組む	.060	.364	-.063	-.097	-.105	.594	.203
13 ベアワークやグループ活動で、まず、はじめに自分から意見や提案などの発言をする	.019	.398	-.004	.003	-.077	.526	.036
15 ベアワークやグループ活動中、他の人の意見を熱心に聞く	.098	.024	.063	-.024	-.002	.461	.017
50 日本語がだんだん重要になってきているから	-.073	-.162	-.053	.035	.072	.041	.764
49 将来の就職のため	-.035	-.139	-.029	.027	-.062	.053	.604
51 日本語を学ぶのが流行っているから	.085	-.182	-.036	.163	.107	.038	.533
52 日本語を学ぶのは知的なこととして周りから評価されるから	.026	.175	-.037	-.027	.078	-.075	.491

第5因子：サブカルチャー

日本の音楽や芸能界、ファッションに関心があり、テレビドラマや映画、インターネットサイトを楽しまたいといった統合的動機づけ。

第6因子：活動積極参加

ペアワークやグループ活動を重要視し、そこでの発言や質問などクラスメイトと積極的に相互交流を行うことで日本語力を高める学習ストラテジー。

第7因子：キャリア

日本語はツールとして重要なもので、日本語を学ぶことは知的なこととして評価が高い上に人気もあり、将来的に就職に有利である、といった実用を考慮した道具的動機づけ。

5-2 因子間の相関関係

次に、下位尺度間の相関係数は、各因子間の関連度の強さを表すものであるが、相関係数が高い ($r > .4$) ののを見てみると「第2因子 実践会話重視」「第3因子 リソース活用」「第4因子 用意周到」「第6因子 活動積極参加」の間の結びつきが強いことが分かった。

つまり、彼らの日本語学習は予習・復習、授業内の活動から課外での言語運用までをしっかりと行う勤勉な学習ストラテジーが重視されていると言えるだろう。また、「第1因子 日本文化理解」と「第5因子 サブカルチャー」の間の結びつきも比較的強い。このことは、伝統的な日本文化に興味がある学習者はサブカルチャーにも興味があることを示しており、広い意味での日本の社会や文化全般への関心、統合的動機づけが高いということも言える。

表2 外的学習者要因の因子間相関

因子間相関	I	II	III	IV	V	VI	VII	平均	SD	α
I. 日本文化理解	—	.311**	.306**	.340**	.446**	.234**	.259**	3.381	.798	.858
II. 実践会話重視		—	.446**	.440**	.204**	.477**	-.038	3.262	.720	.796
III. リソース活用			—	.331**	.327**	.281**	.106	3.703	.766	.772
IV. 用意周到				—	.167**	.280**	.234**	3.502	.721	.785
V. サブカルチャー					—	.079	.247**	3.193	1.152	.830
VI. 活動積極参加						—	-.019	4.096	.544	.742
VII. キャリア							—	3.194	.789	.689

** $p < .01$

5-3 クラスタ分析：どんな因子の組み合わせの外的学習者要因なのか

次に、これらのデータをクラスタ分析にかけ、「外的学習者要因」の因子の組み合わせにより調査対象者がどのような学習者のタイプに分類されるのかについて調べた。これらのことを明らかにするため、Ward法によるクラスタ分析を行い、5つのクラスタを得た。図1は、分析の結果から得られた5群の各得点を表している。分類されたクラスタの特徴

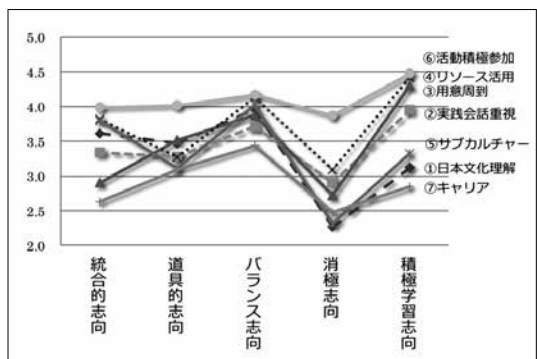


図1 5つのクラスタ

的な部分からその学習ストラテジーおよび動機づけのタイプをそれぞれ「統合的志向」「道具的志向」「バランス志向」「消極志向」「積極学習志向」と命名する。

第1クラスタ「統合的志向」は、因子5（サブカルチャー）、因子1（日本文化理解）といった統合的動機づけの因子が高く、因子2（実践会話重視）、因子3（用意周到）、因子6（活動積極参加）といった学習ストラテジーや因子7（キャリア）の道具的動機づけが低い。したがって「統合的志向」と命名する。

第2クラスタ「道具的志向」は、因子7（キャリア）、因子1（日本文化理解）といった動機づけ因子が比較的高く、学習ストラテジーの因子は高くない。第7因子「キャリア」の得点が最も高いのは第3クラスタであるが、第2クラスタも他の因子に比べて「キャリア」すなわち道具的動機づけが高いので、「道具的志向」と命名する。

第3クラスタ「バランス志向」は、因子のすべてにおいてバランスよく高い。第4クラスタ「消極志向」は、因子のすべてにおいて低い。第5クラスタ「積極学習志向」は、因子2（実践会話重視）、因子3（リソース活用）、因子4（用意周到）、因子6（活動積極参加）といった4つの学習ストラテジー因子が高い。

5-4 学習ストラテジー・動機づけと成績との関係

調査の結果、学習者178名（無回答データのあった調査対象者除く）は第1クラスタに19名、第2クラスタに49名、第3クラスタに57名、第4クラスタに32名、第5クラスタに21名となった（表3）。次に、得られた5つのクラスタを独立変数、前項の分析から得た7つの因子の因子得点を従属変数とした分散分析を行った結果、そのいずれにおいても有意な群間差が見られた（因子1: $F(4,173) = 52.08$ 、因子2: $F(4,173) = 17.73$ 、因子3: $F(4,173) = 30.25$ 、因子4: $F(4,173) = 64.70$ 、因子5: $F(4,173) = 31.78$ 、因子6: $F(4,173) = 7.77$ 、因子7: $F(4,173) = 10.61$ 、 $p < .001$ ）。

分析により学習ストラテジーと動機づけの種類は、ある程度、分類することが可能であることが分かったが、これらによって成績の得点が異なるかどうかについても検討した。次の図2は、横軸に SPOT_2 の平均、縦軸に SPOT_3 の平均を示した散布図である。表中にはそれぞれのクラスタに分類された調査対象者の SPOT の平均が示してある。

これによると、第1クラスタである「統合的志向」がいずれのテストにおいても最も得点が高いことが分かる。続いて「消極志向」、「積極学習志向」、「バランス志向」、そして、最も低い

表3 5つのクラスタの特徴

クラスタ	タイプ	特徴	人数
第1クラスタ	統合的志向	アニメやマンガ、TV、音楽、芸能界、ファッションを楽しみ、伝統的な日本文化に関心が高いが、リソース活用以外の学習ストラテジーは使わない	19
第2クラスタ	道具的志向	仕事や就職など将来の実用を主目的として日本語を学ぼうとする動機づけが高く、日本文化の関心も高いが、学習ストラテジーの活用には積極的ではない	49
第3クラスタ	バランス志向	統合的動機づけ、道具的動機づけのいずれも高く、おおよそいいと思われる学習ストラテジーをすべて行う	57
第4クラスタ	消極志向	統合的動機づけ、道具的動機づけのいずれも高くなく、どの学習ストラテジーもあまり使っていない	32
第5クラスタ	積極学習志向	リソースを活用し、活動に意欲的に取り組み、予習・復習、メモを取り、不明な点は教師に尋ね、学んだ日本語を積極的に実践の場で使用していく	21

が「道具的志向」である。つまり、アニメやマンガ、TV、音楽、芸能界、ファッションを楽しみ、日本文化を理解したいという高い統合的動機づけのもとに学習している「統合的志向」の学習者が日本語力が高い傾向にある。積極的に教室活動に参加したり、リソースを活用したり、実践で使用したり等の学習ストラテジーを駆使する「積極学習志向」、統合的動機づけ、道具的動機づけ、学習ストラテジーすべてにおいて消極的な「消極志向」、逆にすべてにおいて積極的な「バランス志向」の学習者は同程度の日本語力であり、就職のために学習している「道具的志向」の学習者は、日本語力が低いという結果になった。今回の調査では、従来の、道具的動機づけが日本語力向上に直結するという主張（郭・全（2006）、関崎（2009）など）に反する結果となった。

次にこの5つのグループと成績との関係を検討するため、各群に属する学習者の SPOT_3 と SPOT_2 の成績の偏差値の平均点を算出したところ、図3に示したとおり「統合的志向」は54.19ポイント、「道具的志向」は46.47ポイント、「バランス志向」は49.95ポイント、「消極志向」は51.99ポイント、「積極学習志向」は51.54ポイントとなった。

さらにそれぞれの群間に差があるのかを調べるため、2つのテスト（SPOT_3 および SPOT_2）において分散分析を行ったところ、SPOT_3 に関しては有意差が見られなかったが、SPOT_2 に関しては主効果が有意 ($F(4,173)=3.703, p<.01$) であったため、多重比較を行った。その結果、「統合的志向」と「道具的志向」との間に有意差が認められた。なお、SPOT_3 は下位群を識別するため SPOT_2 より難度を低くして作成されており（小林ほか 1996: 209）、今回の対象者に関しては天井効果が見られ、このような結果となったと考えられる。

ここで特徴的なのは、図3において最も高い成績の「統合的志向」は図1において「サブカルチャー」に加えて「リソース活用」の因子得点が高く、逆に図3において最も低い成績の「道具的志向」は図1において「サブカルチャー」とともに「リソース活用」の因子得点が低いことである。このことはサブカルチャーへの興味といった動機づけとリソースを活用した学習ストラテジーが「成績」との間に何らかの関連があることを示唆している。

日本文化、就職、教室内外の学習すべてにおいて積極性を志向する「バランス志向」の成績が良くないのは疑問であるが、他のどのクラスとの間にも有意差が認められたわけではないので、この結果だけから「バランス志向」の学習者と成績が良くないこととは関連性がある、とは解釈できない⁽⁴⁾。

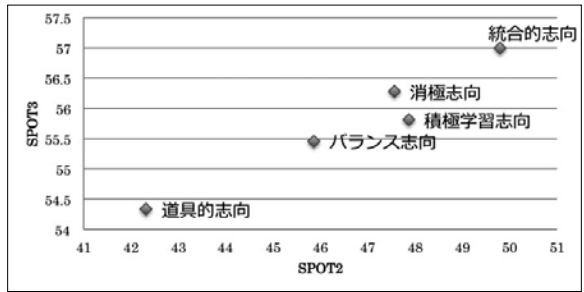


図2 各群の SPOT 成績平均の散布図

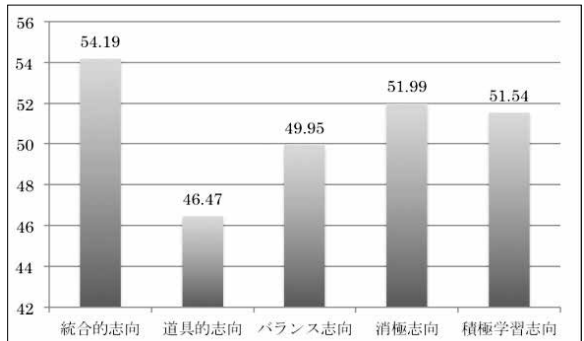


図3 各群の偏差値（成績）の平均

5-5 会話力テストの成績別に見た学習ストラテジーおよび動機づけに関連する要因分析

以上の分析により、学習ストラテジーおよび動機づけのいくつかと成績とに関連があると推測されるが、ここでは調査対象者を会話テストのJSSTの成績上位群と成績下位群に分類し、学習ストラテジーおよび動機づけに影響を及ぼす要因について明らかにする。

JSSTはレベル1からレベル10までの10段階評価であり、レベル1-3は初級、レベル4-8は中級、レベル9、10は上級としている。この10段階を中間値より二つに分けてレベル5までを下位群(28名)、レベル6以上を上位群(47名)とした。表4は成績別に因子得点の比較を分散分析によって行い、両群の差異を検証した結果である。

分散分析を用いて両群の平均値を比較したところ、「第2因子 実践会話重視 ($t(73) = 2.101, p < .05$)」の1項目に有意差が認められた。以上の結果から、「実践会話重視」においては成績上位群は成績下位群に対し有意にその意識が高いことが判明した。日本語の学習ストラテジーや動機づけの高いいわゆる「優等生」の学習者が高いレベルの学習成果と関連していると捉えるのが一般的であるが、今回の調査から会話力が高い中国の日本語学習者は「実践会話重視」の学習ストラテジーが高い傾向にあることが分かった。

表4 JSSTと日本語学習ストラテジーおよび動機づけ ()内は標準偏差

因子	上位群(n=47)	下位群(n=28)	有意差
第1因子 日本文化理解	3.49(0.630)	3.40(0.799)	
第2因子 実践会話重視	3.39(0.611)	3.06(0.760)	*
第3因子 リソース活用	3.63(0.850)	3.75(0.732)	
第4因子 用意周到	3.61(0.706)	3.34(0.635)	
第5因子 サブカルチャー	3.27(1.187)	3.39(0.990)	
第6因子 活動積極参加	4.20(0.486)	4.10(0.506)	
第7因子 キャリア	3.13(0.768)	3.42(0.663)	

* $p < .05$

6. 考察

以上の分析から明らかになったことは次のとおりである。

- I. 中国の日本語学習者にはそれぞれ特徴的な外的学習者要因がある(7因子)。
- II. その外的学習者要因の種類は、ある程度パターン化できる(5タイプ)。
- III. SPOTで測定した日本語力は「統合的志向」の学習者が最も高く、順に「消極志向」「積極学習志向」「バランス志向」と続き、「道具的志向」があまり高くないという傾向を示した。統合的志向と道具的志向の成績の間には有意差が認められた。
- IV. 会話力が高い群は「実践会話重視」の学習ストラテジーが高い傾向にある。

研究課題1は学習者の外的学習者要因と学習成果との関連性について考察することであった。外的学習者要因の因子の組み合わせにより、調査対象者は「統合的志向」「道具的志向」「バランス志向」「消極志向」「積極学習志向」の5つのタイプに分類されたが、そのうち統合的志向の対象者の日本語力が最も高く、道具的志向が最も低かった。また、分散分析の結果、両者の

SPOT_2の成績の間に有意差が認められた。二つのタイプの違いは前者が「サブカルチャー」と「リソース活用」の因子得点が高く、後者は逆に低いという点、それから、「用意周到」の因子得点が前者は低く、後者は高いという点にある。つまり、予習・復習をしっかり行い、単語を覚えたり、参考書を使ったりするなどの自習をするといった日本語学習のための準備をしっかりやるという態度よりも、日本の音楽や芸能界、ファッション、テレビドラマや映画、インターネットサイトなどのサブカルチャーに高い関心があり、それらをリソースとして活用する学習ストラテジーを用いている学習者のほうが日本語力が高いということが言える。近年中国ではアニメなどの映像に合わせて日本語でアフレコを行い、その実力を競う「日本語アフレコ大会」が盛んに行われている⁽⁵⁾が、こうしたリソースを活用した日本語コンテストの人気の高さは、サブカルチャーへの関心が日本語力に影響を与えていることと無関係ではないと思われる。

研究課題2はどのような外的学習者要因が会話力を向上させるかについての考察であった。JSSTの成績と外的学習者要因の因子得点については、「実践会話重視」において群間の差が見られた。その一方で、「サブカルチャー」や「リソース活用」をはじめ、その他の因子で群間に差が見られなかった。即ち会話力については、従来から言われているように、間違いを恐れず、習ったことをすぐ整理し、実際の言語場面で多く使用していく学習ストラテジーが効果的なストラテジーであり、会話力を向上させる、ということが改めて確認できた。

以上をまとめると、中国では、サブカルチャーに関心を持ち、リソースを積極的に活用する学習者に日本語力が高い者が多く、会話力に関して言えば、何よりもまず習ったことをすぐ整理し、実際の言語場面で意欲的に使用していく学習ストラテジーによって身に付ける者がその能力が高い、ということが示唆された。

7. 日本語教育への示唆と今後の課題

本研究において、現代の中国における日本語学習者の日本語力にはサブカルチャーへの関心と関連があるということが分かった。また、会話力にはやはり実践的な会話の経験を積むという学習ストラテジーが関係していることも確認できた。IT環境の激変で学習環境、動機づけ、学習ストラテジーが変化しつつある中、こうして中国の地方大学の日本語学習者の特性を把握することができたことは、今後の日本語教育および日本語学習のあり方を考えていく上で一つの道標を提供することになる。しかし、「自然な日本語」の習得の要因を解明するためには、会話力と学習ストラテジーや動機づけとの因果関係について個別にインタビューする、観察をする等の手法を用いた質的分析を取り入れ、より詳しく分析を進める必要があろう⁽⁶⁾。さらに、「自然な日本語」の測定方法についても精査し、その習得の要因を探っていくことは、効果的な日本語教育を考えていく上で重要な課題である。

謝辞

本研究は、日本語教育国際研究大会（ICJLE）名古屋2012（2012年8月18日、於名古屋大学）において発表した原稿を修正したものです。発表の場で多くの方から貴重なご教示を頂きました。記して感謝申し上げます。なお本研究は、琉球大学中期計画達成プロジェクト経費 戦略的研究推進経費 研究課題名「海外における効果的な日本語教育にかんする基礎研究：『日本語教育研究センター（仮）』設置に向けて」（平成23年度、研究代表者：金城尚美）に基づく研究成果の1

部です。調査にご協力くださった福建師範大学、中南林業科技大学、華中科技大学の先生方と学生の皆様に感謝いたします。

註

- (1) 「統合的動機づけ」と「道具的動機づけ」という枠組みは Gardner and Lambert (1959, 1972) が提唱し、その後 1990 年代まで動機づけの最も中心となるテーマとして盛んに研究がなされてきた。統合的動機づけとは、目標言語の社会に属する人々と交流したいとか、その社会の一員としてみなされたいという欲求をもって学習を進めるといったものである。道具的動機づけは、仕事や就職に役立つとか、単位を取得したり大学へ進学するためといった実用的な目的で目標言語を学習するものである。
- (2) 使用許諾取得の上、使用した。SPOT (Simple Performance-Oriented Test) とは、日本語文の中に抜いてあるひらがな 1 字を自然な速度のテープから流れる日本語文を聞いて埋めていく日本語の運用力を測定するテストのこと。SPOT_3 は SPOT_2 よりも難度が低い。
- (3) JSST (Japanese Standard Speaking Test) とは、日本語に関する知識のみならず運用能力を 12 分間で測ることができる会話力テストで、2008 年よりアルクが実施している。自動音声で流れる 10 題の質問に各 45 秒以内で答える (上～超級の 1 問は、回答時間 60 秒)。それを複数名の評価者が「発話の形」「正確さ」「内容」「敬語」について 10 段階 (レベル 10 が最上位) で判定し、それらに基づき運用能力の総合評価を行う。
- (4) この結果は調査が意識調査を基にしていることも無関係ではないと思われる。すなわち、「バランス志向」は調査対象者が理想とする「優れた学習者」像を反映しており、現実の学習場面における実際の行動を表しているわけではない。
- (5) 調査対象者数名に行ったインタビューによる。
- (6) 例えば、本調査の過程で渡日経験がないが日本語で非常に自然なやりとりができる学習者 1 名に出会った (JSST レベル 10 判定)。特殊事例ではあるが、なぜこの学習者が中国にいながらにして高い日本語の会話力を身に付けることができたのかは、検討に値する。

参考文献

- 荒井智子 (2008) 『学習スタイルの分析法研究—台湾日本語学習者を中心に—』明海大学 博士学位論文。
- 板井美佐 (2002) 「香港における中国人学習者の日本語学習に対する動機 (BF)、学習 ST 及び学習活動上の好みに関する調査—香港 4 大学機関の調査から—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』17.61-79
- 郭俊海・全京姫 (2006) 「中国人大学生の日本語学習の動機づけについて」『新潟大学国際センター紀要』2, 新潟大学, 118-129
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史 (1996) 「日本語能力の新しい測定法 [SPOT]」『世界の日本語教育』6, 201-218.
- 柴原智代 (2007) 「各国のスタンダード作成の意義と日本の課題—ヨーロッパ, 米国, オーストラリア及び中国, 韓国の比較・分析—」『国際交流基金日本語教育紀要』3, 113-122.
- 関崎博紀 (2009) 「中国人日本語学習者の言語学習観の調査—中央民族大学外国語学院日語専業の場合—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』24, 37-50.
- 館岡洋子 (2005) 「留学生の学習動機・学習観・満足度—別科中級クラスの学習者の場合—」『東海大学留学生教育センター紀要』25, 27-46
- 長坂水晶・木田真理 (2011) 「中国の大学の日本語授業における会話指導に関する調査—中・上級レベルを対象とした教室活動の実態と教師の意識—」『国際交流基金日本語教育紀要』7, 43-57.
- 堀越和男 (2010a) 「台湾における日本語学習の動機づけと大学の成績との関係—好成績取得者の動機づけタイプの探索—」『淡江外語論集』15, 淡江大学, 123-140
- 堀越和男 (2010b) 「動機づけと学習ストラテジーが日本語学習の成果に与える影響—台湾の日本語学科で学ぶ学習者を対象に—」『台湾日本語文學報』28, 259-282.

- 宮崎里司・ネウストプニー J.V. (編) (1999) 『日本語教育と日本語学習—学習ストラテジー論にむけて—』 くろしお出版
- 三好理英子 (1998) 「中国の日本語教育における使用教科書の報告—『中日交流標準日本語』について」『多摩留学生センター教育研究論集』1, 東京農工大学留学生センター, 79-90.
- 守谷智美 (2002) 「第二言語教育における動機づけの研究動向—第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として—」『言語文化と日本語教育、増刊特集号、第二言語習得・教育の研究最前線』日本言語文化学会臨時増刊号編集委員会, 315-329.
- 尹松 (2001) 「日本語学習者のピリーフについての意識調査—中国首都師範大学の場合—」『日本語教育研究』41, 言語文化研究所, 115-129.
- 尹智鉉 (2011) 「日本語学習者の第二言語習得と学習ストラテジー」『研究紀要』81, 日本大学文理学部人文科学研究所, 17-40.
- 楊元・酒井 たか子・小林典子 (2012) 「言語テスト『SPOT』の難易度に影響を与える要因—選択肢の効果について—」*Journal of International and Advanced Japanese Studies* 4, 1-16.
- 楊孟勳 (2011) 「台湾における日本語学習者の動機づけと継続ストラテジー—日本語専攻・非専攻学習者の比較—」『日本語教育』150, 116-130
- Chamot, A.U., Barnhardt, S., El-Dinary, P.B., & Robbins, J. (1999). *The learning strategies handbook*. White Plains, NY: Addison Wesley Longman.
- Deci, E.L. 1975 *Intrinsic motivation*. NY: Plenum Press. (安藤延男・石田梅男訳 1980 『内発的動機づけ』誠心書房)
- Dörnyei, Z. (1990). Conceptualising motivation in foreign language learning. *Language Learning*, 40, 45-78
- Dörnyei, Z. (2001). *Teaching and researching motivation*. Harlow: Longman
- Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1959). Motivational variables in second-language acquisition. *Canadian Journal of Psychology*, 13, 266-272.
- Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley, MA: Newbury House.
- Gardner, R.C., & MacIntyre, P.D. (1991). An instrumental motivation in language study : who says it isn't effective? *Studies in Second Language Acquisition*, 13, 266-272.
- Hiromori, T. (2004). Motivation and language learning strategies of EFL high school students: A preliminary study through the use of panel data. *JACET (Japan Association of College English Teachers) Bulletin*, 39, 31-41.
- Macaro, E. (2001) *Learning Strategies in second and foreign language classrooms*. London: Continuum.
- O'Malley, J.M., & Chamot, A. U. (1990). *Learning strategies in second language acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- O'Malley, J. M, Chamot, A.U., Stewner-Manzanares, G., Russo, R., and Kupper, L. (1985) Learning strategy applications with students of English as a second language. *TESOL Quarterly*, 19, 557-584.
- Oxford, R.L. (1989) Use of language strategies: A synthesis of studies with implications for strategy training. *System*, 17, 235-247.
- Oxford, R.L. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York: Newbury House.
- Oxford, R.L., Park-Oh, Y., Ito, S., & Sumrall, M. (1993). Japanese by satellite: Effects of motivation, language styles and strategies, gender, course level, and previous language learning experience on Japanese language achievement, *Foreign Language Annals*, 26, 359-371.
- Schmidt, R. et al. (1996). Foreign language motivation: Internal structure and external connections. In R. L. Oxford (Ed.), *Language learning motivation*. Honolulu: Univ. of Hawaii Press, 9-70.